

■ 今月の特選句 八木健選

**エアコンの販売促進用団扇** (彦阪義久)

最新型のエアコンを売る立場からすれば、団扇  
は競争相手として視野にない。消費電力も低減。  
「エアコンの四文字に潜みエコの二字」

**惜しげなく全裸となりぬ冬木立** (横山喜三郎)

恥ずかしげに「薄紅葉」したのは夏の終り。  
やがて「山粧ふ」の季語をいただき全山紅葉。  
喜んでいただけるなら「裸木」にもなりましょう。

**三代の短足がゆく七五三** (清水呑舟)

短足は差別用語にあらず。和式便所しかり、和服しかり、  
日本の生活に長脚は不便。短足に限る。  
しかし、実際は「嘆息や長脚を見る短足の」

**嚮虫協奏曲をがちやがちやに** (西をさむ)

人間の世界にもいるね。  
自分だけが目立ちたがって「がちやがちや」に和を乱す。  
この際、音楽会のメンバーから除名してはどうかね。

**口紅を婆うつすらと敬老日** (守屋八郎)

介護施設などでも、女性は化粧をしてもらおうと元気になる。  
にもかかわらず、その心情への理解は少ない。  
「敬老日化粧の婆に惚れなほし」

**行く秋やアナログテレビ置き去りに** (稲沢進一)

未だにアナログテレビを見る老夫婦。時代から  
取り残されつつ、行秋を惜しんでいる。しかし、  
置き去りとは、本当は不法投棄のことかもね。

■ 今月の秀逸句 七七をつけてみました

菊人形展姫を裸にしてる (有吉堅二)

・・・無礼者とも言へぬ哀しさ

道譲るつもりか虫の鳴き止みて (麻生やよひ)

・・・息とめてゐる麻生やよひも

男等を隅に追ひ遣る敬老会 (白井道義)

・・・亭主が死んで楽ですなどと

ひと言へ妻の連射や威し銃 (壽命秀次)

・・・竹槍ほどの反論をせむ

食事より薬の多し十三夜 (川島智子)

・・・満腹なればなんでもよろし

怪談に勝る孤独死長寿国 (森 要)

・・・同音異義で長呪国とも

赤い羽根挿してもみたき胸隆し (三木蒼生)

・・・実現無理で仕方なく句に

抜歯する女医の荒業秋うらら (山本あかね)

・・・抜きとりし歯を高々掲げ

食べるだけあれば幸せ老夫婦 (齊藤八兵衛)

・・・残す財産ゼロの言い訳

秋の蚊を退治せぬのも自然保護 (伊藤浩睦)

・・・保護がいつしか仇となるやも

冬近し行く秋惜しむ暮の秋 (可知豊親)

・・・季語重なりは確信犯で

覚悟して虫食ひ無農薬の栗 (宇井偉郎)

・・・虫が選んだほどの旨さよ

初鏡はてな何処ぞで見たる顔 (佐藤古城)

・・・あああの人だ自称俳人

青山桂一

天高しはやりであるか数独誌

蒼天を色なき風が掃きゐたり

秋月裕子

草の花愛して他人に尽くす人

待宵やエコとりサイクル旧きより

どぶろくを飲み干しむせて急ぐなや

鈴木和枝

つり銭もらう日焼けた腕が恥ずかしそう

黒い手袋の女達美人ばかり

自作の南瓜日焼けなんか何のその

鈴木哲也

虫の声小さくなりぬ肌寒し

朝寒の猫なりちぢこまり眠る

好物の無花果皿に盛り上げる

麻生やよひ  
猿酒の肴あやふや与太話  
夜長には釣果だんだん成長し

足立淑子  
冬眠ができぬ神経質な蛇  
戦列を抜けた社長の社会鍋  
隠してもお金が好きな冬の蝶

有富洋二  
親戚のやたら集まり村祭  
特売の目玉となりぬ初さんま  
悪人も同じ香りや菊人形

有吉堅二  
南瓜割り抜き差しならぬこの刃  
体育の日でもできない逆上がり

安藤淑子  
美女案山子流し眼の先に好漢佇つ  
諸先生の頭は垂れず稲穂垂る  
デパ地下の試食廻りで天高し

飯塚ひろし  
秋高しキリンを飼うてみたくなり  
盛況の長生き講座蚯蚓鳴く  
虫更けて呪文で開ける古金庫

井口寿々子  
ひそやかに胸こがしおり女郎花  
伊東線踊り子号と秋風と  
落穂拾ひしみじみ秋の美術館

井口夏子  
人は人私は私唐辛子  
気のあわぬ人の屋敷や金木犀  
ぼろぼろのへのへのもへじすてかがし

池田亮二  
炎天去り急転直下衣更え  
お迎えは百まで待てと敬老日  
酒たばこ色気もありて嫌老日

石川節子  
新米のせせら笑ひしダイエット

高田敏男  
人妻を借りて走つて運動会  
鯖鮎を串刺しにして侘住い  
子沢山女は戻る空蟬に

高橋マキコ  
松茸や土瓶の中を覗き込む  
ヒヨドリの留守ヒヨトリの巣を落す  
猪にあらされているゴミ捨て場

高橋 都  
用もなき我用もなき翳雲  
同行に薬師もをりてとりかぶと  
コンビニの灯に虫群れて子も群れて

高橋素子  
根競べ礼拝堂への汗の列  
汗だくや身振り手振りの共通語  
冷たかり口の壁の中の人

高松雄三  
手をつなぐチャリの二人の十三夜  
ぎんやんまおいでおいでと前をゆく  
煙なくグリルの秋刀魚焼けにけり

田中章子  
村芝居役にこだはる村長さん  
とんとんと棚田の月の上り行き  
蛇穴に入りて振り向くこの世かな

田中 勇  
秋の夜を眉間の光り放つる  
さかみちやゆうれいばなのおでまし  
長き夜の冥想三昧なりけり

谷むつみ  
国宝の城とは知らず稻雀  
秋の蜂箱ごと盗られてしまひけり  
超美人椅子に収まり美術展

種谷良二  
道草の動かぬ証拋みのこづち  
栗飯の栗弁当の蓋浮かせ  
ダークスーツ法被に着替へ秋祭

田村米生  
嫁さんの食はしてくれぬ秋茄子

秋果盛る皮を剥かねば食べぬ子に  
終わるまで立ちつばなしの初嵐

伊藤浩睦

猛暑日の夜に仲秋の月を見て  
鬼やんま昭和にトンボユニオンズ

稲沢進一

この先は崖とは知らず道をしへ  
叩かれて塩でしごかれ駄目胡瓜

井野ひろみ

畦道に座らされたる案山子かな  
姑や収穫するは秋茄子  
木犀の角刈りにした門構え

今城夏枝

新米の一粒づつの立ち上がり  
見つめられ通草の実のはじけたる  
畦道を通せん坊して曼殊沙華

宇井偉郎

師系ナン無所属無頼ちやんちやんこ  
不揃の全集売ってふぐと汁

宇佐美徹郎

唐突に噴水脚を断ち切らる  
髪匂ふ月見が一期一会かな  
七重より始めて到達山吹名

越前春生

ゆさゆさの胸を飾りて赤い羽根  
行く秋や壁のとなりの地獄耳  
手鏡にうしろを映す木の葉髪

大杉正雄

出ずる月宵の寝姿覗きみる  
地に遊び掃寄せられし枯落葉  
鯉幟りインフルエンザ呑込むや

岡部一兆

割れ鍋にとじ蓋をして去年今年  
たかの爪女もとがる程辛し

蠮螋の十字を切つてつるみけり  
牡蠣食へば太鼓鳴るなり巖島

飛田正勝

梨を剥く皮の長さを賭ける妻  
星月夜いくたび借りる外廁  
死神と余命を賭ける新酒かな

中岡久美子

人だます狐の襟巻少女かな  
水槽の河豚まな板の河豚となる  
香れども魂あらず菊人形

永島董玉

一本も虫歯はなきと生身魂  
と首に一寸足らざる初秋刀魚  
徳利をとつくり選りて温め酒

西をさむ

飼い猫の魚を跨ぐ放生会  
代議士の胸にバッジと赤い羽根

原田 曄

曼殊沙華今日も元気に病院へ  
電線の影も持みや日の盛  
辻に佇つ雲水そつと汗拭ふ

ひがし愛

幾度もお礼参りの稻雀  
大捕物相手は人を噛みし猿  
大根干す大根役者揃ひ踏み

彦阪義久

遅延料請求しようか秋暑し  
猛暑日や体温計を吊るそうか

久松久子

人力車に貴婦人きどり秋扇  
金閣の松の手入れぞ威を張りて  
芸のなき者は欠席敬老会

日根野聖子

世の悪に染まつてたまるか新豆腐  
トーストに裏表なし秋の朝

とどは目を細めて居りぬエステサロン

褒められもせず句にもされずに秋の草

奥脇弘久

憂きことの晴れてぞ今朝の酔芙蓉  
孫がゐて出番早まる赤南瓜  
月影のつと消え失せしビルの蔭

藤岡蒼樹

蠅足掻く窓張り付きや小春風  
猪垣を潜り生業一丁咬み  
今年米研ぎうなづける米寿かな

笠 政人

棄つる書をくくる未練やつづれさせ  
新涼や顔の補修に余念なき  
先斗町白粉花の匂ひたつ

藤原セツ子

会う人の誰もが「アツイことです」と  
チンチロリンに呼び止められてしまひけり  
病室の窓を泳ぐや翳雲

可知豊親

稽田に羊を放ち喰はせをり  
息つめて多佳子に迫る雄鹿かな

藤森荘吉

猛暑の日基本的には引き籠り  
秋も早やと書いてそのあと続かない  
ほつとするばかりの秋となりにけり

加藤澄子

神輿のあとのまつりが出番カラスかな  
赤トンボ狭庭に色を添へゐたる  
苦瓜をスライス今日のサラダなり

坊野念寿

二季繋ぐタイムスイッチほどの秋  
紅葉狩り油断禁物カレンダー  
ホームランセンター深く秋惜しむ

加藤 賢

月光の肌まで透くる夜と思ふ  
酒は酒小菊の花片浮かべても  
柄になく親父の籠のくつわ虫

前川敏夫

木守柿鳥に見向きもされぬだけ  
まだ蒼ばかりの老女菊人形  
教えたる子供にばかり釣れる鯊

金澤 健

負け覚悟したる将棋や夜長き  
聖俗に別隔てなき良夜かな  
珍客たる松茸腹に長居せず

松尾軍治

名月や妻は寢床でサスペンス  
バーゲンの文字にみとれる秋の昼  
月見酒あつてはならぬ妻の愚痴

川島智子

おふざけで子に意地悪す神無月  
あの世から夫呼びに来る鉦叩

丸山紘一

「災害」と言ふもむべなる劫暑かな  
迎へ火や不明長寿の魂いづこ  
ハナ植木谷啓迎ふ秋彼岸

川高郷之助

バンカーで七たび打つや秋の天  
きりぎりすおまへを真似ず来たけれど  
黒ぶだう並べて美人は突慥貧

三木蒼生

波紋巴紋刃文どれが好き水馬  
コンピューターウィルスに無き流行風邪

北村マコ

客人は無言で参る望の月  
付け睫毛秋日を仰ぎ神輿かく

三塚不二

望月の三重に振れて手術台  
多摩川のブルーテントや穴かい

虫時雨何やら闇が近うなり

律儀にも一個実をつけ庭の柿

久我正明

芋炊きや笑顔も月も混ぜ合わす  
いわし雲もうすぐ鯨やってくる  
実るほど背中も腹も丸くなる

三橋真砂子

新酒酌む猪口に愚痴の天ご盛り  
明け方の虫にのど飴進ぜたし  
うなぎ屋の暖簾なの字をくぐり入る

工藤泰子

木瓜の実の重きが枝にぶらさがる  
青空を突いて咲きたる曼殊沙華  
切る切符なくてきちきちばつたかな

村上美和

残暑より四十五度の離陸かな  
王様の休息室の竹夫人  
秋の蝶王妃の庭を出たがりぬ

黒澤正行

威の失せし滝馬菊師に水貰う  
急停車すれば案山子の轢死体  
赤い羽根だけは律義や永田族

百千草

九月の空洗ひざらしの吾映す  
母の愚痴ひらりとかはす法師蟬  
億年の夢の一片月今宵

黒田忠一

重陽を押しのかけて来る九・九車  
上半期過ぎて明日は新米だ

森岡香代子

ほおずきを口に転がせ音遊ぶ  
ネオンサイン磨き上げたる大夕立  
ピチピチムチムチプルプルビキニの娘

小杉 隆

蛙売る麻布のスーパー大使街  
四股ふんで力士は地球割る気かも  
おにやんま恋は茜の空の中

森 要

九月だが残る猛暑の苦月かな  
うんざりの暑い暑いにあきが来る

斉藤八兵衛

長生きの秘訣はズバリ能天気  
夫婦の画幸せ色に誤差がある

守屋八郎

痛くなき腹を探らる翳かな  
秋の蚊に踊らされてる墓の前

酒井鹿洋

一服のなき剪定の味気なさ  
破れたるズボン自慢に帰省かな  
ほころびのズボンファッション寒の雨

八木 健

寝返りは謀叛にあらず熱帯夜  
群れてみて孤独とも見え池の鴨  
ののさんと一茶は月を呼んで句に

桜井宇久夫

片づかぬ部屋に炎暑の居坐れり  
焼そばの固きキャベツや踊の夜  
盆休み明け空缶のにぎやかに

柳澤京子

曼殊沙華皺をのぼして誕生日  
いが栗の子供集めて栗拾い

佐藤古城

禿頭を幼に打たる敬老日  
年取や爺の丈越す十歳児

山内重昭

横転の車の下に虫すだく  
月明かり事故車のオイル手からむ  
底紅や痛さもにじむ事故現場

佐藤義子  
孫育ちババも食べれと菓子もらう  
マッコリ飲み韓国ドラマ嫌う彼  
衣替えとたん暑く秋笑う

佐野萬里子  
年賀状の予約注文夏葉書  
年忌予約住職逝かれ秋暑し  
芋の葉も立枯れ土手の曼殊沙華

佐野ゆきこ  
一ページ読めば寝むれり読書の秋  
ダイエット意志の強さは三分間  
運動会応援しつつ舟をこぎ

澤田篤恵  
夜目遠目月の綾なす影絵かな  
落水や達者で暮らせ稻雀

柴田真一  
赤潮を払い船出す日本丸  
芋食ふて天下論ずる男出よ  
秋短か閻魔が来るぞ相模湾

清水吞舟  
神童も小町もまじる日向ぼこ  
いまだ呼ぶ妻の愛称神の留守

首藤虎男  
だだこねし出来悪だんご愚たらず  
遣り繰て黄金千貫買漁る  
まだまだと未熟じや句はずしぬ

壽命秀次  
鈴虫やポリボックスにコンサート  
銀蠅の嗅ぎ回つてる茶の間かな

白井道義  
鶏頭のこれみよがしに小突かれし  
夜長してとどのつまりは徹夜かな

山本あかね  
死にたれば只の蜂なり雀蜂  
敬老日自祝のビール自粛せり

山本けい子  
ほどほどの値段夕餉の焼秋刀魚  
山栗について来し虫チツチ鳴く  
焼茄子の上に踊らせ花かつを

山本 賜  
二皿の枝豆かこむ五人かな  
地上いま松茸育つ十九度  
コスモスにちぎれんばかり手を振つて

横山喜三郎  
吾が余生のらりくらりと冬の蠅  
名演奏捧げ鈴虫身を挺す

渡辺さだを  
祭笠脱げばヒョットコ・オカメかな  
老兄も逝くや満月待ちきれず  
秋風や俺もそろそろ死支度

渡邊美代子  
野紺菊手をつながれる齡となり  
老ひて尚七曜ありて冬紅葉